

## ヒ ル ト ッ プ ・ ハ ウ ス 傍 聴 編 記

山 田 尚 勇 (情報研)

毎日お昼になると、御殿跡の山上会議所が教官食堂と化し、各学部の先生方が三々五々昼食に集まって来られる。別に学部ごとに決められた席がある訳ではないようだが、いつ頃からか、各学部の好みのテーブルが大体決まってしまうと言ってよい。卒業後 20 年以上になるが、外国生活が長く母校に舞い戻って来てからは 2 年程しか経っていない私にとって、この昼食時は理学部ばかりでなく、他の学部の先生方のお考えについても勉強できる貴重な小一時間である。

私にとって特に興味のあることは、諸先生方が日本の現状をいかにお考えかということ、そして日本が現在かかえている諸問題に対していかなる対処策をお持ちなのかということである。諸先生方の全ては幾年間かを海外、それも欧米で研究生生活を送られた御経験をお持ちであるが、そうした御研究生生活の中にあっても、常に祖国を意識され、彼我の比較考察を試みられ、日本の弱点ははっきり自覚され、それに対処する諸策をお持ちの方ばかりである。

かりである。

ところが不思議なことは、わが大学を眺めてみると、諸先生方のそうした<sup>うんちく</sup>蘊蓄がさっぱり反映しているようには見えない。それが何故であるかとつらつら考えてみるに、どうも各先生が、そうした憂いの心を持って大学を見詰めているのは自分だけらしい、という孤立感と諦観にとりつかれていらっしゃり、それに、私が未だ学生時代にはやった芥川龍之介の、“危険思想とは常識を実行に移そうとする考えである”，とかいう言葉に要約された保守主義に囚われていらっしゃるように見える。

それで、そうした前向きのお考えをお持ちなのは決して少数派ではないということを立証し、静的な知識を動的な現実に変換していただけるようにと、ホワイト・ハウスならぬヒルトップに在るハウスでの傍聴の記憶を適宜編集してみることにした。もちろん、某大国の大家政治屋 N がウォーター・クロゼットの中でいつ誰と何をしゃべったとかしゃべらなかったとか言う話と違って、幸い

なことにわれわれはどの特定の先生が何をお話しになったかということなどは一切立証する必要はないし、また今となつてはそれは不可能である。同時にわれわれは、肝心な所へ来ると故障したり、また誤操作を許したりするテープレコーダー（S社の言い分も聞いてみなければなるまいが）も使用しなかったので、要点だけは押えてあると思う。ところで今回はまずは、大学問題に焦点をしばることとし、また、一々話し手を変えるのも思わしいので、語り手として一人の仲々辛辣な先生を想定して御登場を願うことにした。

\*            \*            \*

大学紛争以来、東大の有り方については大学改革委員会ができたりして、大量の希望と情熱と努力が注入されたにもかかわらず、結局は教官の自己規律についての方針が出来上った位で、紛争の時に約束された大学改革は何等実現せず現在にいたっている。大体、アメリカの一流大学では入学生の四割位しか卒業できず、後の六割は途中で振り落とされてしまう。それが日本では入学した学生は余程のことがない限りまず卒業できると言つてよい。学生に対してでさえこんなに甘い教官が、ましてや自分等の仲間である他の教官について、たとえ彼が少々無能であったからとか、あるいは不都合があったからとかで、何等かの形ででも処罰したりすることができる訳がない。そんな審査は時間と労力の無駄だから、誰も本気になって実施するはずがない。第一、若干の教官に言わせれば、本来ならそうした審査を受けて厳しく批判されてもよいはずの長老教授連がその審査を云々しているのだから、全くの八百長ではないかと疑われても仕方がないだろう。

大学紛争の一因として、キャンパスの混み過ぎが挙げられ、その解決のために大学移転の問題が改革委によって真剣に検討された。ところが移転に一般論としては賛成であったはずの各学部が、いよいよ構想が煮詰まって各論に入つて来ると一斉に反対に回つてしまい、結局は移転問題もうやむやになつてしまった。

この問題に限らず、大学には現在いろいろな欠陥があると考えられる。例えば、大学の自治が欧米的な意味において、すなわち民主主義の原則に基づいて確立していない。その基本は立法、行政、司法に代表される三権の確立であり、多数決の行動原理と、それにともなう少数派の権利の擁護であろう。移転問題に限つていうと、このような大問題は一旦大学の方針として多数決で決つたら、それは個々の学部の自治権の範囲外であるべきで、さもないと大学全体の自治などあり得ない。もとより利害多々ありて相反することも多いので、多数決の原理

が行動原理として採用されなければならないし、またたとえ一度は反対であつたとしても一旦決まつたらそれには積極的に服従すべきであらうし、また行政者はそれを実施する義務があり、服従を拒む者は処罰されるべきである。

民主主義とは個人の尊厳の上に打ち立てられた行動原理である。しかしそれは馴れ合いでものごとを運営することを意味しない。かつて日本のある私立大学の教授が学生部長の担当であつた時、学生が山岳部の創立を願い出た。あまり大きくないその大学では、もし学生が山で遭難でもして大学が捜索隊でも繰出す羽目になると、その経費だけで大学が破産することになるというので、極力学生の説得に勉めたそうだが、仲々うまく行かなかつた。それで、その教授は、アメリカ出張の折、一体アメリカの大学ではこのような問題を如何に処理しているかと聞いてみた。答は簡明直截であつた。「大学生は大人である。大人が自分の責任において山に登り、自分の責任において遭難するのに対して、大学は責任は無い。大学としてはできるだけの援助はするが。」

個人の確立とはかくも厳しいものである。学生にそれだけの責任と自己規律を与えないでいて、近頃の学生は無責任だなどと言う教官がいるとしたら、それはその方が余程無責任であらう。

それだけ確立された個人の集団があつて初めて民主主義が成り立つのであるが、その確固たる個人の独立した意見の調整手段として多数決の原理が初めて意味を持つて来る。何事によらず徹底的に議論して後に必ず票決に持込み、多数の意志によることで従うという原理は、自分の信念を持ち得る者のみに分かる行動原理であらう。

一度び決定されたことを実行に移す行政官である学長や部長は、わが大学では選挙によって選らばれる。アメリカの大学では理事会によってあるいは知事によって任命される形式はとるが、事實は資格審査委員会（Search Committee）のメンバーが教授会で選挙によって選出され、その委員会の推薦者のリストの中から任命されることが多い。何事によらず、選挙は俗に「期限付きの独裁者の選出」とまで言われる位、一度選挙によって選ばれた役員の権限は強力である。この点日本の学長や部長が劣多くして“権”少ない高級小使的な存在であるのとよい対照であらう。

そんなに強力な行政権を持った役員を選挙するのだから、各個人あるいは各利益集団は当然自分達の利益を最も良く代表する人物を当選させようと、選挙には皆は積極的になる。わが大学のある先生は初めて総長の選挙の時、総長候補者を選ぶ委員会の委員を選出するに当

て、新参者として特に誰という好みもなかったのに、長老、中堅、若手教授群の利益を代表すると思われる先生方の名前をそれぞれ一名ずつ計三名書いて投票したのだが、票読みが始まったら、出て来る名前が全部長老教授だけなのにびっくりした。アメリカのサーチ・コミッティの選挙では考えられない風景であつたらである。

これに関連してわが大学の欠陥の一つとして、情報伝達網の形態が木構造であるということが挙げられる。これは講座制に代表されるように、全組織がタテの構造であり柔軟性がなく、情報の伝達は下から上へあるいはその逆に、総長を頂点とするピラミッド形の木形をしているので、例えば他学部の同じレベルの先生方との共同利益を持った情報の親密な交換があまり円滑ではない。したがって、総長選挙の時に、アメリカで見られるように全学の若手助教授が自分達の利益を代表して共同戦線を張るということはあまり起こっていないと思う。これでは各共同体の真の利益を反映した大学の運営はできないのではないかと思うし、先生方もそうしたことに積極的に関心を示して下されないと思う。その点、助手の人達が作っている会のようなものは、先生によっては毛嫌いされる方もあると聞いているが、こうした真の民主的運営への第一歩ではないだろうか。

こうした多数決による真の大学の自治の点から考えると、教養学部の学生定員が増えないために、時代の要請に応じた新学課の創設ができないなどという現状は正にナンセンスである。

教養学部が定員増に反対するのはそれ相当の理由があつてのことであるとしても、全ては土地の問題、施設の問題、人手の問題、予算の問題等のからんだ、相対的なものであろう。土地、施設の問題は後にまわすとして、例えば全予算を倍にして定員を 30% 増すことは、果して教養学部は反対なのであろうか。それで不満なら予算を 3 倍にしたらどうであらうか。大学が大きくなり過ぎたといつても、アメリカの大学に比べればまだまだ小さなものなのだから。如何なる条件の下でも定員増反対というのなら、それはもう大学自治の一員としての資格を自ら放棄しているのだから、われわれは別に新しいものを作るより外に仕方がない。まさか教養学部がそんなことを言うはずもないので、われわれは来たる何年かは他学部の改善を延期してでも先ず教養学部を充実させるべきであらう。

大学に真の民主的自治が確立されていないために、いろいろな問題をかかえたまま、何とか停滞感から抜け出そうと考えされたのが、大学院大学構想のように思われる。臭いものにはふたをしたまま何とか前進しようと

いう案だとの非難の声も聞くが、真の自治がなければこゝでもするより仕方がないのだろうか。どの学部も移転に反対で、しかもキャンパスを拡張しようというのだから。しかし後に残された現学部の問題は片付くわけではあるまい。成る程、現キャンパスも多少何とか都合できる面もあろう。現在本郷あたりで一坪の建物面積を確保するには大ざっぱに言って約 100 万円はかかる。だが大学の建物を見てまわると、屑屋に売ったのでは坪当り 10 万円にもならないがらくたを何年来と積み上げてある面積も少くないようだ。一定面積以上の使用には教授の研究費から大学に支払いがなされるアメリカ式の帳記法を採用すれば、大部有効に使われる面積が増える所も多いと思われる。

それも限度があるので、学部移転をするにしろ、大学院大学を創るにしても、早晚新しいキャンパスが要るのは目に見えている。それで新キャンパスについて少々考えてみたい。

日本は狭くて人間で一杯で、もう土地が無いとよく言われる。大学の移転問題が云々される時、必ず議論にのぼるのが、この土地問題である。たしかに池袋や新宿の駅で雑踏にもにもまれ、一坪二千万円で売れた土地のことを聞くとそんな気もする。しかし一方において過疎地帯の出現が由々しき問題とされている。日本に欠けているのは秩序をたてて物ごとを行なう政策であらう。アメリカの空を飛んだことのある人は、人家の全くない広大な平地にも整然と立派な道路が碁盤の目のようにつけられているのにお気付きと思う。町や村のできる前に道路は作られてしまうのである。ペンシルバニア大学の教授達の住居の分布を見ると、大学を中心として四方八方に 40 キロメートル位の所に住んでいる方々がかなり多い。それだけ道路が完備しているのである。ひるがえって東京はどうであらう。東京と大阪を合わせて日本全土の約 3%, そこに約二千二百万人が住んでいるにしては恐ろしく交通が不便である。ニューヨーク市はオープン・スペース（公園や道路など）が全面積の約 45% を占めているのに、東京のそれは約 16% である。それでいてニューヨーク市の方が単位面積当り東京より大勢の人間が住んでいる所の方が多い。すなわち人間が余計な移動を強いられることになる。しかも郊外へと目を移してゆくと、東海道線、中央線沿いはまだましであるが、それ以外の方角ではまばらな交通路が面を覆っているに過ぎない。一寸電車線から直角に外れると、もうそれは孤立した辺境となり、生活には恐ろしく不適な所となってしまう。したがって会社も人々もますます交通に便利なところを求めて殺到し、地価は上り、交通は増々混雑し、ま

た新しい地下鉄が加えられ、増々人間が殺到し、ということになる。大体交通網などはこの狭い日本では人間の住んでいないところこそ優先して整備して、生活できるようにすることこそ急務であり、人間の混み過ぎたところなどにさらに新しい地下鉄などを作るのは全体的に見て愚かなことであろう。

今からではもう遅いとか、あるいはアメリカのような大国と比較するのは適当でないという反論もあるので、日本の11分の1の面積に日本の10分の1の人口を持つオランダについて一寸言及しておこう。なるほどオランダはほとんど平坦である。しかし平地の大半は海面より低いし、岩盤のない泥のみの沼沢地である。この国が強力な政策によって人口分散を半ば強制的に実行したのは第二次大戦後であり、それによって過密過疎のないゆとりのある国を作ったのである。そこには綿密に計画されたプランがあったことは言うまでもない。日本の政治と比べると正にプロフェッショナルとアマチュアの差である。自由主義のもとでは土地の所有権に制限をつけられないなどというのは大して意味をなさない。西ドイツにおいては、フォルクスワーゲンの本社のある地方の州では土地は一切州に帰属し、個人による私有は認められていない。日本のような国では、必要に応じて土地の強制収容を行うのも仕方がないのではないか。

さて、十分に広大な土地が確保出来たとすると、いよいよ大学の街造りである。20年前にシアトルのワシントン大学に行った時は、学生の新しい寄宿舎が出来たばかりで、その広さ、便利さにど肝を抜かれた。今度20年振りて再び訪れてみると、更に大きなそして快適なのが二つも新たに建っていた。大学もそれだけ大きくなっていったのである。オハヨー大学も18年の間に益々モダンで益々大きな寄宿舎を建て増してあったし、ペンシルバニア大学も次から次へと新しい高層ビルの中に学生を住まわせていて、それだけで一つの町を成す程である。一体アメリカでは先生も学生もキャンパスから15分以内で行ける位の処に住むのが理想として実行され、逆に先生がキャンパスから離れて住む様になったら、必ずといってよい程大学紛争になるといわれる。その位生活というのが教育の一部として大切にされている。

日本はどうであろうか。今度開校した筑波大学は、最少限の校舎だけを建てて、後は勝手におやりなさいという主義らしい。先日もある雨の日に自動車で出掛けたところ、道路の舗装が途中で切れ、泥んこの中で車が立ち往生して遂に目的地に到着出来ずに引き返した人達があった。日本の国立大学は一般に有るものと云えば校舎位

で、学生寮などはきわめて少く、教官宿舎は一般公務員宿舎でお茶をにこし、門前に喫茶店があるかないか位であって、一体学生はどうやって生活するのだらうと考えたと、騒動を起こさない学生の忍耐力に感服させられる。一旦入れたら4年後にはだまって卒業させてもらえる温情主義へのお礼心でもあるのだらうか。

そんな心掛けだから、建物自体だっていたってお粗末な安建築である。全館大理石張りというテキサス大学には到底及ばないとしても、この気候の悪い日本で冷房装置もない。お役人に言わせると前例がないからだというが、大体前例ばかり尊ぶ役人に未来の事をまかせるシステムが狂っているのだらう。今建てられる建物は、我々が全部死んでしまった100年の後も使われている筈の恒久設備である。無理算段をしても新技術、新思考を先取りすべき筋合いのものである。国家百年の大計という発想法は、明治と共に死に絶えたのであろうか。

GNPが世界第二位となった日本のことであるから、この辺で、従来の大学にない新しいものを理想を追いながら伸び伸びと考えてみるのもよいと思う。住宅環境が、或いは生活環境が人格形成に及ぼす影響については色々調べられているし、そうした結果を効果的に利用することは大切であらう。

従って真に個を確立した日本人を造ってゆくために、先ず住宅問題の解決からということになる。国土の狭い日本では当然もつと立体化した住宅というものを定着させねばなるまい。立前としては、住宅公団がその任に就いていると言えようが、公団住宅に住んでみるとこれがまあ何とも手狭で、住民の大方の夢は何時かこのアパートを出て一戸建ての家に住みたいということで、同じアパートに何10年も住んで何等不服のないニューヨークの住民とは雲泥の差がある。こんな事では日本の土地問題、住宅問題が解決する訳がないのであって、住宅公団は率先して、せめて床面積が120平方メートル位はあるアパートを造り、日本人に、アパート生活とはかくも快適なものかという体験の持ち主をふやさなければなるまい。120平方メートルというと大きいように聞こえるかもしれないが、アメリカの教授達の家を調べたところによると、住居面積が220平方メートルから350平方メートルというのが普通であった。イギリスなども没落したといって馬鹿にする向きもあるようだが、21世紀の住宅問題などとは真剣になって取り組んでおり、国民の福祉を犠牲にした高度成長と、利根的消費を進歩と錯覚している日本人は、世界の田舎者としか思えない。

そうした未来の日本を築き上げてゆく人材を育成する任にある大学は先ず率先して学生にそうした快適な生活

経験を持たせなければならない。現在の公団住宅に育ち、豚小屋に毛の生えたような学寮に四年を送った人間に 21 世紀の日本を設計させれば碌なものが出来ない事は当然の帰結ではなからうか。近ごろハウスという言葉がやたらと使われるが、聞いてみるとこれは野菜栽培用のビニールハウスのことを指し、石油暖房の入っているを常とする由である。集中暖房のない住宅などは成る程ハウスではないと感じさせる。

新キャンパスを造るに当っては、教官、学生に野菜以上の生活を味わわせるだけの住宅環境を整備した、広々としたものを計画して欲しい。住宅公団のように、すれ違うにはどうしても横の芝生に一旦踏み込まなくてはならないような小径をつけておいて、「芝生に入らないで下さい」と立て札するような愚は止めてもらいたいと思う。ニュー・ジャージーの州立大学であるラトガーズ大学は今新キャンパスを息長く造っている。二・三年前に完成した生物化学だかの建物はコロニアル・スタイルだかの美しい落ち着いた建物で、そう言われるまではもう百年も前に建てられたのかと思った程である。その隣にはいかにもモダンな数学と情報科学の建物がある。普通には極度に新旧のスタイルを混ぜるのはあまり良い趣味とはされないようだが、この場合少しもおかしくない。何故なら、両建物の間には美しい緑の芝生に覆われた大学のゴルフコースが横たわっているのだから。それを見た時、スタンフォード大学で、二つの人工知能研究所の間が約 3 マイル程あって、美しい森の中を抜ける舗装された道路を車を駆って行ったのを思い出した。どちらもこれから 100 年はキャンパス問題では困らないだろうと言っていた。こういう処でなければ奔放自在、真に独創的なアイデアは芽生えないのかもしれない。

さて、以上のような雄大な構想のもとに大学のキャンパス造りを行うとして、先立つものは費用であるが、これは当然税金で賄われるべきものである。今諸物価値上りて、国民の生活が逼迫している時に、その様な余分な出費を賄う程国家財政にゆとりがないと言われそうである。果してそうであろうか。

日本は GNP が世界で第二位と豪語している。実はこの中には土地の値上りや台風による被害の修復まで含まれるので、少々インチキ臭いのであるが、それでも第二位は第二位なのだから、それ相当の経済的基盤があるに違いない。あまり GNP、GNP と騒がれたので少々きまりが悪くなり、福祉指数とかが一時考案されたが、それによると今度は如何に日本の福祉制度がお粗末かが一目瞭然となり、政治屋や役人の間に不評を買い、早々に忘れさせられるという茶番劇があったのも、ついこの間であ

る。そこで一寸見方を変えて、一体 GNP の何%が税金として徴収されているかを眺めてみると、数年前のデータで英国が 43%、スウェーデンが 41%、カナダが 37%、西ドイツが 34%、米国が 31% であるのに引き較べて、日本はずっと落ちて何と 16% を割っている。世界の一流国としては如何にも政治の無能無策を思わせる。何故なら、良い政治は金のかかるものなのだから。

他国をかえりみて、日本の徴税額は倍にすべきであろう。日本位国家がやらなければならない仕事が多く残されている国は少いのだから。同時に国家公務員の給与は少くとも倍に引上げ、能吏は厚く酬われるべきである。公務員並びにそれに準じた人達に安月給を払っている事により、結局のところ日本人は安物買いの銭失いを地で行っている事になる。例えば通産省が 230 にものぼる外郭団体を作っていたり、企業の利権争いの片棒がつかい降りするのも、つまりは安月給の果の停年退職後の保身策につながっているのだから。

それではそれだけの増税がどこから出て来るべきなのだろうか。少くともそれは俸給生活者の月給からではないだろう。職業上に必要な経費の控除さえ認められていない安月給にはそんなゆとりはないだろう。

当然大企業からももっと税をとり立てる事になるだろう。そんな事をしたら厳しい国際競争に敗れるという事はしばしば聞くが、それならそれなりに資本主義の自由経済に徹すべきであろう。先ず、国際的に競争力のないものは競争力のつくまで合理化するか、その出来ないものは一切やめてしまうことであろう。手はじめに農業をとろう。もう 15 年位も前の統計であるが、日本の農業の用いている耕耘機の総馬力数と、日本の 20~30 倍もの農地を耕しているアメリカの用いている耕耘機の総馬力数とを比べてみると、何と日本の方が 2 倍位になるという。そんな日本の農業がそのままでは農作物が世界の相場の倍にも三倍にもなるのが当然で、自由経済の原則にのっとり、そんな農業はやめるべきである。そうすれば給料生活者も安い食料品が買えることになり、企業といえども世界市場での競争力を増せる。東京の生活物価指数はニューヨークを 100 とした時に既に 150 を突破しているのに、労働者の賃金は未だ 1/3 以下である。

そういうとすぐに、一旦緩急の折には食糧の輸入が途絶えるので、農業は必須であるという議論がなされる。

日本人は（福祉の充足度の低さによる将来の不安が誘因となって）世界で一番貯蓄率の高い国民であるという。日本は国家としても同じ覚悟をすべきで、乞食じゃあるまいし、国民の 2 年分の食糧位は常に準備しておくのが国の責任であろう。その備蓄で間に合わないよう

な国際異変が起ったなら、我々は観念すべきであろう。そうなれば、どうせ石油も原料も入って来なくなるのだから、たとえ食糧があったとて日本は崩壊する以外に手はない。そう悟ってしまえば、日本の外交も現在のたいこもちの感覚より脱皮して、もっとしっかりしたものになるであろう。何しろ世界の動きに日本の生死がかかって来るのだから。農民が失業する筈はない。日本改造のためには100年もかかる程仕事が山積みしているのだ。

\*            \*            \*

さて、外国版、ウォータ・クロゼット盗聴記に較べてゴシップ的な面白味は全然無い傍聴記になったが、さす

がはわが大学の先生方だけあって、その構想の偉大さ、その想像力の奔放さ、そしてその意図するものの鋭さには非凡なものがあると思う。問題となるのは、現実の日本に返って考えてみる時、こうしたアイデアが実行に移される可能性はまずあんまりないのではないかということである。しかし、それが出来ないなどというのはのはどんな素人にでも言える。だが政治家は素人ではない、プロである。そのプロが素人並みのことしか言えないようではプロとは言えまい。さてさてお立ち合い、お立ち合いの中にプロの政治家はござらぬか？